



萩谷将司、二年ぶり二度目のステップスギャラリー個展である。前回同様、人間のいない風景を描いているのだが、何か新鮮な印象を持つ。大きな変化が訪れたのだろうか。前回との違いを、漆黒の闇から青味のかかった画面になっただけとは判断することは出来ない。筆が上達したとか、対象に対する洞察が深まったとかいう問題ではなく、描く意識がより克明になったのではないかと予想する。デジカメどころか携帯電話で気軽に撮影が可能となった今日、朝方や夕時に毎日通っている風景が異なって見えることに気がつき、写真に撮ってみると真っ黒であることに驚く経験は多々あろう。人間の視覚とは機械のそれと異な

り、実際よりも明るく見ようとする傾向がある。このような見解で萩谷の作品に目を投じると、ここに描かれている世界は幻想ではなく現実であることに気付く。しかし「見えている」ままであることと、従来考えられていた「リアリズム」には多くの違いが存在することを実感するに違いない。我々は何時の間にか「絵画史」に囚われて、本来の自分自身の感覚を忘れてしまっているのだ。すると、視覚など何と不確定なものかと疑う必要が生じてくる。ならば何を頼りに生きていけばいいのか。温度、湿度という皮膚感覚、匂い、音という他の感覚を総合して感じる「雰囲気」である。萩谷の絵画にはこれがある。

